

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720180

研究課題名(和文) 18世紀フランスにおける博物学の興隆と描写詩 ビュフォン受容の問題を中心に

研究課題名(英文) The Prosperity of the Natural History and the Descriptive Poesy in the Eighteenth Century of France-the Reception of Buffon

研究代表者

井上 櫻子 (INOUE, Sakurako)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：10422908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀後半にフランスで発達したジャンルである描写詩は、四季の変遷とともに変化する自然の姿と、自然と調和して生きる人間のさまざまな感情を歌ったものである。本研究は、詩人たちが自然の事物を描き、人間の感受性の働きについて考察する際、ビュフォンの『博物誌』から受けた影響について明らかにした。そして、いまだ十分に研究されていない描写詩というジャンルの重要性を強調し、自然科学と文学の密接な関係を浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：The Descriptive Poesy, a genre that developed in the second half of the Eighteenth Century of France, chants not only diverse aspects of the nature that changes with the seasons, but also various sentiments of human beings who live in harmony with the nature. This research revealed the influences of Buffon's Natural History over the poets when they described natural beings and reflected on sensitivity functions. It pointed up the importance of the Descriptive Poesy, a genre that has't yet sufficiently examined, and made clear close relations between natural science and literature.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：仏文学 哲学 美学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀後半、フランス文学に自然描写の美学をもたらしたのはジャン＝ジャック・ルソーであるとはしばしば指摘されてきたことである。しかし、ルソーが小説『新エロイズ』や自伝三部作において自然への愛を歌い上げた頃の定期刊行物について本研究課題の研究代表者が調査を進めたところ、当時フランスでは田園での素朴な生活の賛美を共通の主題とした韻文が次々と発表され、人気を博したことが明らかになった。これが、のちに描写詩という18世紀特有のジャンルを形成することになった作品群である。描写詩については、日本国内のみならず、フランス本国でも、エドゥアール・ギトンの『ジャック・ドリールと1750-1820年のフランスにおける自然の詩』や年刊誌『ルーシェ、アンドレ・シェニエ研究』に収められた論文以外に、まとまった研究がほとんど存在しない。

(2) しかも、これらの研究の多くは、描写詩を文学的な観点から分析したものであり、18世紀における人間論、自然観をめぐる思想的議論と描写詩との関連について検討する試みは、いまだ行われていない。

(3) したがって、本研究課題の研究代表者は、博士論文執筆時より、一貫してルソーやディドロをはじめとする啓蒙思想家たちの美学論考、人間論との関連から描写詩の分析を行ってきた。それは、「18世紀は哲学の世紀であり、詩的精神は死滅した」という従来のフランス文学史の捉え方に疑義を差し挟み、18世紀後半におけるフランス詩学、美学の変遷をたどる上で、描写詩の研究を進める重要性を浮き彫りにするためであった。

(4) 描写詩の発展と、啓蒙思想家たちの人間論、美学的論考との関係について考察を進めるうち、本研究課題の研究代表者は、より視野を広げて、描写詩における自然の叙述に注目する必要性に気づいた。詩人と思想家が等しくビュフォンの『博物誌』に展開される知識を受容した過程をたどりながら、思想界での関心事が詩的創造に与えた影響について考察を深めたいと考えたことが、本研究課題の着想へとつながった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、描写詩を手がけた詩人たちが自然の事物を描き、人間の感受性の働きについて考察する際、当時フランスで隆盛を極めた博物学、特にビュフォンの『一般と個別の博物誌』をいかに活用したか、明らかにすることにある。サン＝ランベール、ルーシェ、ドリールといった詩人たちが、ルソーやディドロなど同時代の思想家と同様に博物学に関心を寄せ、自然の体系を解明しよ

うとしたその様子を探りながら、今まであまり研究されなかった描写詩というジャンルの重要性を再確認するとともに、自然科学と文学の関わりや描写の美学の発展という問題に新たな回答を示すことも目指した。

(2) また、描写詩というこれまで等閑視されてきたジャンルに光を当てることにより、フランス文学史における描写の発展の問題という、たびたび議論の対象となりながら未解決の問題に新たな観点から回答を示すことも本研究課題の目的であった。

(3) さらに、18世紀末から19世紀にかけての博物学と文学における自然描写との関連については、ゲーテやノヴァーリスといった作家を対象として、ドイツ・ロマン主義研究の領域で盛んに行われてきたものの、フランス文学研究においてはほとんど行われてこなかった。したがって、本研究課題の研究代表者は、描写詩の発展と博物学との関係を検討しながら、ロマン主義時代の文化の超域化現象とともに、独仏の文化、精神性の独自性を相対的視点から示すことも目指した。

## 3. 研究の方法

(1) まず、本研究課題の研究代表者は、ジャック・ドリールの後期作品の分析から始めた。第一に、ジャック・ドリールの後期作品をこれまで行われてきたように純粋に文学的観点から読み解くのではなく、思想的観点からアプローチする可能性を確認する。そのために、後期作品の一つである『想像力』に展開される感受性と快樂についての議論を啓蒙思想家の感受性論と比較検討した。

(2) ドリールの後期作品を思想的観点から読み解く可能性について検討した後、この詩人の後期作品に織り交ぜられる自然描写に、ビュフォンの『一般と個別の博物誌』の影響がどのように見受けられるか確認した。その際、特にドリール最晩年の著作である『自然の三つの領域』に注目した。「1. 研究開始当初の背景」で挙げたE. ギトンの『ジャック・ドリールと1750-1820年のフランスにおける自然の詩』では、ドリールの代表作『庭』の解説に焦点が当てられており、詩人の最晩年の著作『自然の三つの領域』にみられるビュフォンの影響について全く触れられていない。しかし、『自然の三つの領域』には、たびたびビュフォンに対する言及が現れているし、またこの詩にあらわれる自然の事物の描写には、当時最新の博物学的発見も盛り込まれていたため、読者の理解を助けるべく、キュヴィエによる注釈が必要になったことから、『一般と個別の博物誌』との関係性についての検討が不可欠だと考えられたからである。また、ティエリー・オケによる論考『ビュフォン 博物誌と哲学』(2005)を

はじめとして、フランスにおけるビュフォン研究は、この博物学者の思想体系の理解に力点をおいたものである。本研究課題の研究代表者は、むしろビュフォンによる自然の叙述とドリールの自然描写との関連に注目することにより、ビュフォンについての先行研究との差異化をはかり、文体家としてのビュフォンの特質を浮かび上げようとした。

(3) 続いて、『自然の三つの領域』についての考察をふまえて、ドリールからさかのぼり、ジャン＝アントワヌ・ルーシェの『一年の十二月』に認められるビュフォンの影響を探った。詩人たちが詩的な美しさを備えたビュフォンの文体を韻文において模倣するさまをたどりながら、韻文は散文に対し絶対的優位にたつとする古典主義美学がどのように崩壊したか明らかにした。このような問題は、アニー・ベック『近代フランス美学の生成 古典的理性から創造的想像力へ 1680-1814年』など、啓蒙の世紀における美学の変遷をたどった主要な研究書でいまだ扱われたことのないものであるが、フランス文学史において古典主義からロマン主義へのパラダイム・シフトがおこる瞬間をとらえるうえで、きわめて重要な問題であると考えられたからである。

(4) さらに、ドリール、ルーシェの作品に展開される自然描写にみられるビュフォンの影響について検討した結果をふまえて、描写詩というジャンルを確立した詩人ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールの『四季』の検討へと考察の範囲を広げた。そしてこの作品に認められる自然描写に、当時の博物学的知識がどのように反映されているか検討した。

(5) 以上の研究を遂行するにあたり、まず、研究代表者個人で 18 世紀フランス文学、思想関係の書籍を購入した。そして、現在個人で入手不可能な資料については、慶應義塾大学メディアセンター所蔵の書籍（おもにビュフォンの『一般と個別の博物誌』の諸版）を活用した。さらに、平成 23 年度、24 年度、25 年度の夏期休暇、および平成 25 年度の春期休暇中にフランス（パリ）に 2～3 週間滞在し、おもにフランス国立図書館にて描写詩の発展に関する資料、および博物学関連の著作について文献調査を行った。

(6) 本研究課題を遂行するにあたり、国内外の 18 世紀フランス文学、およびアンシャン＝レジム期の韻文の専門家と研究交流を行った。そして、さまざまな観点から研究を進める上での助言を受けた。まず、慶應義塾大学名誉教授鷺見洋一氏、新潟大学准教授逸見龍生氏、一橋大学准教授小関武史氏らとともに、慶應義塾大学三田キャンパスにて『百科全書』研究会を月一回の割合で開催した。

研究会では、中心的メンバーである鷺見、逸見、小関の三氏、さらに、定期的に研究会に参加される名古屋市立大学教授の寺田元一氏から、デイドロおよび『百科全書』研究の現状について貴重な情報を得た。また、本研究課題の研究代表者が、学部、大学院時代に指導を受けた京都大学大学院文学研究科教授増田真氏からは、ジャン＝ジャック・ルソーの美学論考の研究の現状について教示を受けた。フランスの研究者からは、きわめて多様な観点からの助言を得られた。まず、ナンシー第 2 大学にて研究発表を行った際には（「5. 主な発表論文等」[学会発表]）、ナンシー第 2 大学教授アラン・ジェヌティオ氏から、17 世紀、18 世紀にフランスで刊行された田園詩に関する文献情報を得ることが出来た。次に、ルーシェの『一年の十二月』の注釈を分析するにあたっては、トゥールーズ大学教授ジャン＝ノエル・パスカル氏の助言を受けた。同氏は、18 世紀後半の韻文の専門家であり、『ルーシェ、アンドレ・シェニエ研究』の編集を担当している。最後にパリ滞在時には、本研究課題の研究代表者が、パリ第 4 大学に博士論文を提出した際の指導教授である、同大学名誉教授シルヴァン・ムナン氏から、18 世紀フランス詩全般に関する資料調査の進め方や、テキスト分析を行う際の手法について教示を受けた。特に、同氏からは、研究代表者がサン＝ランベール『四季』批評校訂版を制作するにあたり（「5. 主な発表論文等」[図書]）、適切なテキスト注釈のあり方について、助言を受けた。こうした国内外の専門家からのアドヴァイスのおかげで、本研究課題の研究代表者は、円滑に研究を進めることが出来た。

#### 4. 研究成果

(1) ドリールの『想像力』に展開される感受性と快楽についての議論とデイドロの感覺論的人間論との関係についての調査をすすめて、その成果をフランス本国で観光されている学術雑誌『フランス文学史雑誌』に投稿、査読を経て掲載された（「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]）。本誌は、最も歴史の古いフランス文学研究関連の学術雑誌の一つである。ここから、本研究課題の研究代表者による考察の妥当性が、フランス本国の研究者にも認められていることが確認されるだろう。

(2) ドリールの『自然の三つの領域』に現れる動物の描写に、ビュフォンの『一般と個別の博物誌』の中で展開されるさまざまな動物種の解説がどのように反映されているか検討した。その成果は、慶應義塾大学文学部の学内紀要『藝文研究』に発表した（「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]、）。

(3) 『自然の三つの領域』の分析をふまえて、

ルーシェ『一年の十二月』にみられる動物の描写に見受けられるビュフォンの影響について検討し、『『百科全書』・啓蒙研究論集』に投稿、査読の結果、掲載された(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文])。本論考では、ビュフォンの『一般と個別の博物誌』の読者であったルーシェとドリールの描き出す動物の描写を、古典主義の代表的詩人であるラ・フォンテーヌの動物の描写を比較し、18世紀末のフランスにおいて詩的言語がどのように変容したのかという問題について一つの回答を示した。ゲーテをはじめとするドイツの詩人たちが科学に関心を寄せていたことはよく知られているが、フランスの詩人がビュフォンの『博物誌』を下敷きにしながら自然描写を展開していたという事実を明らかにした論考はこれまでほとんど存在しなかった。そのためにこの研究成果は、おもに『百科全書』研究会のメンバーから注目を集めた。

(4) ルーシェの『一年の十二月』にみられるビュフォンの影響を検討するにあたり、研究代表者は、この作品に詩人自ら加えた注記に注目した。その際、作品の注記に展開される政治学的議論にジャン＝ジャック・ルソーの『社会契約論』の影響が認められたので、その考察結果を論文にまとめ、フランス本国で刊行されている18世紀韻文に関する学術雑誌『ルーシェ、アンドレ・シェニエ研究』に投稿、掲載された(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文])。

(5) ルーシェ、ドリールについての考察をふまえつつ、サン＝ランベールの『四季』に見られる自然描写の分析を進めた。サン＝ランベールが伝統的な田園詩の主題を引き継ぎながらも、同時代人による「自然」の発見をどのように自らの詩的世界に盛り込んでいったのか、という問題について検討を進め、フランス、ナンシー第2大学で口頭発表を行った(「5. 主な発表論文等」[学会発表])。本発表後、ナンシー第2大学教授アラン・ジェヌティオ氏とフランスにおける田園詩の系譜の変容について、意見交換を行ったが、その中で、本研究課題の研究代表者の研究の方向性が妥当であることが確認された。

(6) サン＝ランベールの『四季』に同時代の博物学的言説の影響がどのように見受けられるか検討するにあたり、研究代表者は主に『四季』第二歌「夏」に見られる熱帯の自然の事物の描写とそれに詩人自ら加えた注記に注目した。その際、灼熱の太陽がもたらす厳しい暑さと、急流がもたらす涼やかさのコントラストの描写、酷暑の夏が人間の肉体に与える影響についての考察に、『百科全書』に展開される人間論の影響が見受けられることが明らかになった。そこで、その調査結果を、まず慶應義塾大学文学部の学内紀要

『藝文研究』に発表し(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文])。さらに考察を深めた上で、「啓蒙思想と『百科全書』」に於ける日仏研究集会(2012年9月29日～30日 於慶應義塾大学)にて口頭発表した(「5. 主な発表論文等」[学会発表])。さらにその内容を論文にまとめたものが「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]。会場には、『百科全書』研究を専門とする日仏の研究者が集まったが、サン＝ランベールとディドロの関係をめぐる研究代表者の考察は、特に当時パリ第10大学教授であったマリ・レカ＝ツイオミス氏の高い評価を受けた。そのため、本研究課題の研究代表者は、この後も継続して『四季』第二歌「夏」に見られる『百科全書』の影響について検討を続け、平成25(2013)年、その成果の一部を慶應義塾大学学内紀要に発表した(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文])。

(7) サン＝ランベールの『四季』に関する一連の研究がフランスで評価され、本研究課題の研究代表者は、『四季』の批評校訂版を作成することとなった。この批評校訂版は、フランス近代作品協会より平成26(2014)年6月末に刊行されることが決定した(「5. 主な発表論文等」[図書])。これは、ヴァリアントや典拠に関する注釈のほどこされた世界初の『四季』批評校訂版となる。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)  
井上 櫻子「サン＝ランベールの『四季』と『百科全書』 第二歌「夏」についての一考察」、『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』、査読無、第 57 巻、2013、p. 1-13

INOUE Sakurako, 《Jean-François de Saint-Lambert, lecteur et collaborateur de l'Encyclopédie : autour d'une note sur < L'Été > des Saisons》、『『百科全書』・啓蒙研究論集』、査読有、第 2 巻、2013、p. 115-130

井上 櫻子「『百科全書』の読者にして寄稿者、ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール『四季』第二歌「夏」の注釈をめぐって」、『藝文研究』、査読無、第 103 巻、2012、p. 133-148

INOUE Sakurako ; 《La pensée politique de Rousseau dans Les Mois》, Cahiers Roucher-André Chénier, 査読無, 第 32 巻, 2012, p. 89-103

井上 櫻子「ルーシェ『一年の十二月』

(1779)とドリール『自然の三つの領域』(1808)にみられる動物の描写と博物学』、『百科全書』・啓蒙研究論集』、査読有、第1巻、2012、p. 221-239

井上 櫻子「ジャック・ドリール『自然の三つの領域』(1808)にみられる動物の描写と博物学(2)』、『藝文研究』、査読無、第101巻、2011、p. 166-181

INOUE Sakurako 《 Des idées de la sensibilité à l' âge des Lumières à la poésie lyrique du romantisme : autour de *L' Imagination* (1806) de Jacques Delille », dans *Revue d' Histoire littéraire de France*, 査読有, v. 111, n° 3, 2011, p. 593-604

井上 櫻子「ジャック・ドリール『自然の三つの領域』(1808)にみられる動物の描写と博物学(1)』、『藝文研究』、査読無、第100号、2011、p. 193-206

〔学会発表〕(計 2 件)

INOUE Sakurako, 《 Jean-François de Saint-Lambert, lecteur et collaborateur de l' *Encyclopédie* autour d' une note sur < L' Été > des *Saisons* », Colloque franco-japonais sur les Lumières et sur l' *Encyclopédie*, 2012年9月29日、慶應義塾大学

INOUE Sakurako 《 Saint-Lambert, poète lorrain », Le Mécénat littéraire et artistique, 2012年3月14日、Université de Nancy II

〔図書〕(計 1 件)

INOUE Sakurako, Société des textes français modernes, Jean François de Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, 2014, 336 p. (刊行決定)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

井上 櫻子 (INOUE, Sakurako)  
慶應義塾大学・文学部・准教授  
研究者番号：10422908

(2)研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ( )

研究者番号：